

# 青森県における伝統芸能の維持継承に向けた対策のあり方

森田ゼミナール

## 1. はじめに

今年1月の朝日新聞に、佐井村の「福浦歌舞伎」で恒例行事だった毎年3月の一般観光客向けの「特別上演」を今年は断念したという記事が掲載された。上演断念の理由は、少子高齢化による役者や演奏者のなり手不足というものだった。今年8月の陸奥新報にも、鱒ヶ沢町で4年に1度開かれる「白八幡宮大祭」で後継者不足による伝承の難しさが課題になっているとの記事が掲載されている。その一方で、青森市内で毎年夏に開かれる青森ねぶた祭りでは囃子のなり手が足りないという声は聞かない。

では、たまたま記事が載った伝統芸能が後継者の不足や参加者の減少に悩んでいただけで、他の県内の伝統芸能は同じような問題を抱えていないのだろうか。また、今は大丈夫だとしても、少子高齢化と人口減少が進む中、今後も後継者を確保していくことはできるのだろうか。我々は、この疑問を明らかにすべく、県内で伝統芸能の維持継承に関わる団体・個人に対してヒアリング調査をおこなった。

本論文の構成は以下の通りである。まず、青森県における伝統芸能の特徴を明らかにする。次に、ヒアリング調査に基づき、伝統芸能の現状と抱える問題について明らかにするとともに、維持継承の可能性について考察する。そして最後に、維持継承の可能性を高めるために必要な対策とそのあり方について考察と提言を試みる。

## 2. 青森県内における伝統芸能の特徴

伝統芸能をどう定義づけるかによって、それに含まれる芸能の範囲も異なってくると考えられる。ここでは、無形民俗文化財の指定基準を満たした風俗慣習、民俗芸能を伝統芸能と見なし、重要無形民俗文化財7件、青森県無形民俗文化財54件を対象に、芸能の種類、有する地域について把握を試みた。結果は以下の表にまとめてある。

表を見ると、津軽地方27件、南部地方34件となっており、南部地方の件数が若干多い。県全域で見ると、踊り（動物仮装の踊り・その他の踊り）が5割弱、祭礼が1/4強を占めており、この2つで7割強を占めている。

地域別に見ると、津軽地方では、獅子踊りの件数が最も多く14件、次いで祭礼が7件となっている。なお、津軽地方の祭礼行事の多くは、「精霊流し」や「送り火」の一種として捉えられるものが多い。一方、南部地方では、山車行事の件数が最も多く9件、次いで神楽が8件、駒踊り5件となっており、神社との関連性がうかがわれるものが多い。

---

※ヒアリング調査にあたっては、「岩木登山囃子保存会」、「大川平荒馬保存会」、「金多豆蔵人形一座」、「黒石観光協会」の皆様にご協力頂きました。ここに記して、感謝の意を表します。

### 青森県における伝統芸能の種類、有する地域

		県全域	津軽	南部	具体名：例
神楽		9	1	8	鮫の神楽
田楽		1	0	1	八戸えんぶり
歌舞伎		1	0	1	福浦歌舞伎
踊り	動物仮装の踊り	26	15	11	念仏鶏舞
	(獅子踊り・獅子舞)	(18)	(14)	(4)	獅子舞、獅子(熊)踊、獅子(鹿)踊
	(駒踊り)	(5)	(0)	(5)	南部駒踊り
り	その他の踊り	4	3	1	東通のもちつき踊
	(荒馬踊り)	(2)	(2)	(0)	嘉瀬奴踊
祭礼 (山車行事)		16 (9)	7 (0)	9 (9)	青森ねぶた 三社大祭山車行事
年中行事		2	1	1	田子の虫追い
その他		2	0	2	加賀美流騎馬打毬
		61	27	34	

出所：青森県ホームページのデータを基に集計

※重要無形民俗文化財に関しては、風俗慣習、民俗芸能、民俗技術区分のうち民俗技術区分に含まれる「津軽海峡及び周辺地域における和船製作技術」を除いている。

### 3. 人口減少が進む青森県において継承は可能か？

総務省の人口動態調査によると、青森県の2017年1月1日時点の人口は1,319千人で前年より14,909人減少、減少率は1.12%で、秋田県に次ぐ全国2位となっている。社会増減に関しては全国ワーストの-0.47%である。また、国立社会保障・人口問題研究所がまとめた『日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）』によれば、青森県の将来推計人口は2025年時点で1,161千人、2040年時点ではさらに減り932千人と100万人を切ると予想されている。

このように人口減少が急速に進む青森県において、伝統芸能の維持・継承は可能なのかとの疑問に基づきヒアリング調査を実施した。調査対象を津軽地方に絞るとともに伝統芸能の種類にも着目し、今別町（大川平）の荒馬踊り、中泊町の金田豆蔵人形劇、黒石市の黒石よされ、弘前市のお山参詣を対象とした。

#### 3. 1 各伝統芸能の活動状況

今別町（大川平）の荒馬踊りは、男性が馬をかたどった衣装を纏い、女性はその馬の手綱を握る「手綱取り」となって、ペアで踊る踊りである。8月上旬の荒馬祭りへの参加が活動の中心であるが、町内外のイベントにも参加している。活動の中心を担っていた青年団がなくなり30年前から保存会が中心となって活動をおこなっているが、保存会メンバーの高齢化が問題視されていた。近年は、県外の大学生が荒馬祭りに参加して祭りを盛り上げてくれ参加者も増えているが、人口減少により荒馬を見てくれる観客が少なくなっている。

中泊町の金田豆蔵人形劇は、セリフが全て津軽弁で、観客との対話をはさみながら進められる人形劇である。中里駅構内にあるミニシアターでの上演のほか、電車内での上演や出張上演をおこなっている。人形劇を見た後、金木へ向かうツアーもある。弟子はなく1人で活動しており、財政的には町の支援がなけれ

ばやっっていけない状況である。

黒石市の黒石よされは、廻り踊り、組踊り、流し踊りの3つの踊りからなり、祭り期間中は踊り手が沿道を踊り歩く。小中高等学校での振付指導や指導者の県内外のイベントへの派遣、よされ学校の開催などをおこない、黒石よされの普及啓発に努めている。また、次世代の担い手を育てるために「黒石よされ後継者育成事業」を実施している。しかしながら、学生・児童の減少、進学・就職段階での若い世代の県外への転出の増加などにより、次世代の担い手や踊りの参加者は減っている。

弘前市のお山参詣は、向山、宵山、朔日山と3日間に渡って行われる年中行事で、2日目の宵山では、登山囃子に合わせて、「サイギ、サイギ」と唱えながら参拝者は岩木山神社に向かう。最終日の朔日山では、岩木山の山頂付近でご来光に向かって手を合わせ、五穀豊穰を祈る。小中高等学校での登山囃子の出前講座のほか、一般の人が参加しやすいように体験型ツアー「レッツウォークお山参詣」なども実施している。参加者が少ないため、東京にも支部を開設し会員の増加を図っている。

### 3. 2 ヒアリング結果から見る伝統芸能が抱える問題

以上、4つの伝統芸能の活動状況をみると、参加者の減少や次世代の担い手の確保に悩まされている様子が見えてくる。

参加者の減少に対しては、「まずは知ってもらうことが大事」と県内外のイベントへの出演や宣伝をおこなっているが、減少の歯止めにはなっても増加にまではなかなか至らないようである。

次世代の担い手の確保についても、若い世代が減っていることで担い手の母数が減っており、確保は簡単ではないようである。人口が100万人を切り、ほぼ2人に1人が高齢者（65歳以上）という状況が生まれる可能性が高いことを考えると、担い手の確保は、今後ますます難しくなっていくことが予想される。黒石よされやお山参詣では、小中学校で出前講座をおこない次世代の担い手育成に取り組んでいるが、大学進学や就職を機に県外へ転出してしまうことが少なくなく、子どもの体験促進を担い手の増加に結びつけることが難しい様子も見えてくる。

また、活動を維持するための費用については町や市からの支援を受けていることが多く、支援がなければ即刻、活動の縮小、場合によっては活動の休止に至ることも考えられる。

以上、伝統芸能が抱える問題を幾つか挙げたが、これらは全て伝統芸能が存続できるかどうかという問題に関わってくる。存続可能年数について尋ねた結果を見ると、今の担い手が生きている間は存続できるが、それ以降は分からないとのことで、先行きは全く楽観できないと言える。

ヒアリング結果表

	荒馬踊り	金太豆蔵人形劇	黒石よされ	お山参詣
活動の主力	地区の若者 (15人程度)	演者(1人)	よされの講演会に 来てくださる方達	お山参詣保存会
次世代の担い手	現在活動の主力 となっている若者 達	担い手なし	育成事業の参加 者(小・中学生)	担い手なし
活動費用負担先	会員(会費) イベントへの出演 料等を充当	町、JR(支援) 自己負担	市(補助金) 一般・企業(協賛 金)	会員(会費)
活動に際しての問 題	・将来の担い手が いない(子どもがい ない)  ・祭りの観客が少 ない	・お金がないと弟 子を持ち、継承さ せるどころか存続 させることも難しい  ・面白い娯楽が溢 れているため、興 味をもってもらえ ない	・部活が忙しくて やめたり、県外へ 転出していったり して、若い世代の 担い手が増えない	・少子化に伴い将 来の担い手が不 足
存続可能年数	30年程度	演者が動ける間	若い世代の担い 手は減っている が、まだまだ継続 可能	出来る限り続けて いきたい
維持継承の意義	・地区の人の心の よりどころ	・古いものに目を 向けるきっかけ(昔 はこういうものがあ ったと知って欲し い)	・様々な世代がコミ ュニケーションをと ることができる ・魅力ある町にし てくれる	・先人たちへ思い を馳せる年間行 事であり、津軽人 の魂の旋律である
存続対策の必要性	必要 (大学生とスクラム を組んで活動して いる現状を維持し ていくことが大切)	必要 (経済的な問題が 大きいため、対策 をたてることが難し い。)	必要 (よされ学校などを 開講しているが、 若い担い手の減 少を食い止められ ない)	必要 (イベント等への出 演依頼は断らない 方針)

※ヒアリング先：岩木登山囃子保存会、大川平荒馬保存会、金多豆蔵人形一座、黒石観光協会

#### 4. 伝統芸能の維持継承に向けた対応策・支援のあり方

伝統芸能の維持継承に向けて少なからず問題があることが分かった。ここでは、問題への対応策、また対応に際して必要な支援について考える。なお、問題への対応策については、「人口減少社会における中山間地の伝統行事(芸能)維持・継承策について」等を参考に設定した以下の6つの枠組みをもとに考察を進める。

##### 問題への対応策

1. 情報発信・啓発活動の推進
2. 子どもの体験の促進
3. 外部人材の掘りおこし
4. 外部人材の受入推進
5. 企業との協力の強化
6. 公的関与の必要性

## 1. 情報発信・啓発活動の推進

宣伝効果があるため、岩木登山囃子保存会では、出演依頼のあったイベントには必ず赴き囃子を披露している。大川平荒馬保存会では、他の地域の若い世代との交流の機会を設けることで認知度を高めようとしている。生で見せることによって伝わる魅力はあるはずなので、イベント出演や交流の機会を積極的に増やすことは必要だろう。また、知ってもらわなければ始まらないため、Facebook等 SNS の一層の活用も望まれる。ただし、情報をアップするだけでは見てもらえない可能性が高く、見てもらうためのノウハウの提供など行政や企業による支援も望まれる。

## 2. 子どもの体験の促進

将来の担い手を増やすため、岩木登山囃子保存会では小学校での出前講座を開講、黒石観光協会は黒石よされ後継者育成事業を実施しており、大川平荒馬保存会でも子どもの観客を増やそうとしている。しかしながら、少子化が進んでいることや進学や就職を機に若い世代が県外へ出て行ってしまふことを踏まえると、その地域の中だけで取り組んでいても担い手を増やすことは難しいと考えられる。体験の機会を地域の外でも増やすことを考える必要があるだろう。

## 3. 外部人材の掘りおこし

遠方に出向き芸能を披露するといった努力により、マスメディアに取り上げられ、その存在を知ってもらうことも多いようだ。その甲斐あって、今別では、興味を示した県外の学生が参加し、祭りを盛り上げているという。このことから、掘りおこしのためには、「遠征して披露する」などの活動とマスメディアへの働きかけをセットで考える必要があると言える。活動の中心を担うメンバーの高齢化が進み、体力的に厳しいものがあるとの声もあり、新たな担い手の確保は差し迫った課題となっている。外部人材を引き込む必要性は今後ますます増していくだろう。

## 4. 外部人材の受入推進

金太豆蔵人形劇は、人形を3本指で動かすため、センスや体力、記憶力が必要で、やる気だけでは難しく、また経済的理由からも、外部人材の受入は難しいようである。実際、受入活動はおこなっていないようである。黒石よされは、振り付けが3つあるため、後継者育成会に参加せずに踊ることは難しい。受け入れの枠組みはあるが、育成会の開催日時や開催場所は決まっており、市外、ましてや県外から参加することは難しく、外部人材の受け入れにはつながっていない。今別の荒馬祭りには、県外の大学生が毎年参加しており、祭りの存続に一役買っている。現在では、地元の人よりも多いそうだ。

以上からは、芸能の種類、地域、認知度などにより、受け入れのし易さに差異があるように思われる。しかし、その差はどうかであれ、参加者や担い手の増加を

目指すのであれば、外部人材の受入を推進する必要があるだろう。お山参詣でおこなわれている一般参加型の体験ツアー「レッツウォークお山参詣」のように、気軽に参加できるツアーを企画し参加者を募るといったことも考える必要があるだろう。

## 5. 企業との協力の強化

黒石よされやお山参詣では、企業単位による参加も見られ、協賛金や奉納金といったかたちでの経済的支援もおこなわれている。金太豆蔵人形劇一座は JR から経済的支援を受けているほか、JR のホームページでは一座の紹介もおこなわれている。企業からの更なる経済的支援を期待するのは難しいように感じるが、参加者については、企業全体ではなく課などの単位での参加を促し増やしていくことは可能だろう。また、JR など旅客輸送に関わる企業のホームページでの紹介は、遠方からの集客につながる可能性が高く、積極的に連携の強化に取り組むべきであろう。

## 6. 公的関与の必要性

会員から集める会費で運営している所が多く、活動の維持はできたとしても PR 活動、とりわけ県外への PR 活動となると、手が回らないようである。したがって、公的機関による PR が重要となってくる。資金面に関しては、市民・企業から広く協賛金を募っている黒石よされを除き、公的支援を必要としている。

しかし最も必要とされているのは、担い手が生まれる環境づくりへの支援である。行政には、直接的な支援以前に、若い世代が定住するような魅力的な環境をつくって欲しいとの声に応えることが望まれる。

なお、今別の荒馬祭りでは、近年、韓国人観光客が増えているそうである。外国人観光客にも目を向けていくのであれば、外国人向けの観光案内所の整備や「通訳案内士」の増員に取り組む必要もあるであろう。

## 5. おわりに

伝統芸能の維持・継承に関わる問題の多くは、参加者の減少に収束するように感じる。県外の大学生と共に祭りをつくりあげている今別町の荒馬祭りを見れば分かるが、若い世代の中には伝統芸能に興味を持ち外からわざわざ駆けつけるものもいる。外から興味を持たれることで地域での関心も高まることを考えると、参加者の増加は、いかにして外の人材を惹きつけ引き留めるかという問題に対応していると考えられる。

ただし、そのためには、まず情報発信をおこない目に留めてもらうことが必要となる。県外への PR 活動の費用を捻出できないとの意見もあったが、「団体」「行政」「JR」の3者が一体となり PR することも考えてはどうだろうか。魅力を発信しそれが次世代の担い手の確保につながるよう取り組みをサイクルとして機能させなければならぬと言えるだろう。

## 参考文献

青森県「国・県指定文化財一覧」(<http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/sitei-itiran.html> 閲覧日：2017年9月25日)

国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成25年3月推計）」(<http://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson13/t-page.asp> 閲覧日：2017年9月25日)

下伊那地方事務所「人口減少社会における中山間地の伝統行事(芸能)維持・継承策について」(<https://www.pref.nagano.lg.jp/kikaku/kensei/shichoson/chiho/documents/simo2.pdf> 閲覧日：2017年9月25日)

「白八幡宮大祭の「カシ禰宜」地域一丸で継承」『陸奥新報』(2017年8月12日)  
隈元 信一「福浦歌舞伎、人手不足に泣く 恒例の3月上演断念」『朝日新聞』(2017年1月29日)

総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数(平成27年1月1日現在)」([http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01gyosei02\\_03000062.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei02_03000062.html) 閲覧日：2017年9月25日)